

# 陽気だより

養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます

No. 41 2010. 8. 15

第5号(24年9月号)から

「陽気」は、昭和24年4月の創刊、今年で61年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。



上田理太郎

## シベリヤ哀歌

雪と氷のシベリヤにも、春のいぶきが差してきた。だが、あわれ十九の少年兵はきょうも故郷の母を呼ぶ!

### 一、郷愁

うに寒くて眠れない仲間らしかった。

夜中にふと目がさめた。足の先が痛いほどつめたくなっていた。指を動かしてみたり摩擦してみたりするが、容易に温もりそうにない。

「おい、那辺じゃないか?」私はその中に那辺を見出して驚いた。

「ウオー、ウオー」

近くに狼のなき声が聞える。

外は物凄い月明で、積雪があまりに光り、狼はその世界で餌に飢えてないのだろうと想像していると、足の先の寒さが全身に流れてくるように感じるのであった。

思い切って起き上がった。そしてペチカの側へ行ってみる。三、四人うづくまっっている。その中の一人がペチカの徹夜当番で、後は私と同じよ

靴を焼く——寒さに馴れない捕虜たちが、演ずる仕草であつた。

十二月に入ると急に寒さが加わる。それでも、防寒具は十分に与えられなかった。靴もその一つだ。二十人の班に五足か六足かの配給はあつた。しかし、それは公平に分けられなかった。まっ先に下士官が取り上げてしまい、残りの二、三足を、兵隊の古株がうまく云いくるめて取ってしまった。全体がそうだから訴えてゆくとところが無い。当たらない者には辛ほうかつた。零下十度から二十度の中で、古い靴下一枚だ。足の凍えるのが全身をしびれさす。それは、足の先から脊髄にかけて長い針を刺すような痛みを伝える。五十分の作業中を歯をくいしばってこらえているが、休憩になると、夢中で焚火の中に足を突きさすのだ。靴を脱いでいるだけの余裕をもてないのだから。靴のままでは温かい筈はないのだが、火の中に足を入れていただけで、気が休まるのであつた。しかし、五分—十分、そうしているうちに、靴の底はすっかり焼けてしまつていた。底抜けの靴では、雪の上に素足で立っているようなものだ。全く泣き面に蜂のしまつて、この仕草から凍傷にかかる者が何人となつて出た。

「またやったのか」

「靴を焼く——寒さに馴れない

「昨日、やったばかりじゃないか」

「ええ、今日また靴を焼いてしまったので、罰にやってるんです。……」

「またやったのか」

「靴を焼く——寒さに馴れない

「昨日、やったばかりじゃないか」

「ええ、今日また靴を焼いてしまったので、罰にやってるんです。……」

「靴を焼く——寒さに馴れない

「昨日、やったばかりじゃないか」

「またやったのか」

「靴を焼く——寒さに馴れない

「昨日、やったばかりじゃないか」

「またやったのか」

「靴を焼く——寒さに馴れない

「昨日、やったばかりじゃないか」

「またやったのか」

「靴を焼く——寒さに馴れない

「昨日、やったばかりじゃないか」

「またやったのか」

「靴を焼く——寒さに馴れない

「昨日、やったばかりじゃないか」

「またやったのか」

「靴を焼く——寒さに馴れない

「昨日、やったばかりじゃないか」

「またやったのか」

「靴を焼く——寒さに馴れない

「昨日、やったばかりじゃないか」

「またやったのか」

「靴を焼く——寒さに馴れない

「昨日、やったばかりじゃないか」



(後略)

# 信仰例話 (道友社刊『真実の道』より)

## 道は末代

道は、末代の道やから、通ってゆく中には暑い日もあれば、寒い日もある。その中を、気永い思案で、先を楽しんで通ってゆくなら、たしかなもので、御教祖のおしめしになつた足跡は、そこにある。これを通してゆけば道は立って行くが、つい立たんようになるのは人間心で道を急ぐからである。

(清水由松 講話 みちのとも 三十年記念号)

## ほどこし

東本教会の中川姉は、明治二十九年、愛児を背に、東京に布教に出た。一年経って、祖母が危篤だといふので故郷に帰った。ところが帰つてみると、上京するまで七年間、



鼓笛隊の本通りパレード

郷里で匂いがけ、お救けと苦しい中から救上げた人々の家が、わずか七年間にほとんど潰れたり破産していた。そこで姉は、初めて悟った。

## 与えられたもの

K氏は庭にかぼちやを植えた。夏になってそこに見事なのが二つ実った。近所の人から、「早くお採りにならないと盗られますよ」と注意された。

「神様が自分にお与えにならないものなら盗られるでしょうし、神様が私にお授け下さったものであったなら、盗られずに済むでしょう」

K氏は笑いながら言った。ところが、近所の人の言が当って、二つとも盗られてしまった。

K氏はやはり笑っていた。しかし、不思議なことに、その盗られた茎から又茎が伸びて、今度は誰にも届かないような高いところに四つ、しかも以前より大きく見事なものが実った。

(信心十話)

(よろこびの生活)

そよ風のように やさしく 手元に届けたい

# アナタへの手紙

信仰のこと 社会のこと そして人生のこと

著 讓 吉澤  
(新津分教会長・新潟教区長)  
四六判並製 224頁・価格未定  
養徳社 出版  
天理市川原城町 388  
☎(0743)62-4503  
http://yotokusha.com

「陽気」創刊 60 年記念出版

## 人生二終なし

じんせいにおわりなし

—父 柏木庫治を語る—

- 三人の兄妹によるてい談
- 「陽気」掲載記事
- 柏木庫治小伝

定価=1,260円(税込) 送料 200円

「陽気」創刊 60 年記念出版

## 道の八十年

—松村吉太郎自伝—  
天理教の歴史とともに  
生き抜いた信仰軌跡

松村吉太郎 著 定価=1,680円(税込)  
(高安大教会初代会長) 送料 200円

「陽気」創刊 60 年記念出版

## お道の人のおとておきの話

お道の人のお美しい心象風景 52 話

朝席・夕席に最適です

定価=1,260円(税込) 送料 200円

## 養徳社 よもやま話

○……先日、所属の大教会の鼓笛隊が、こどもおちばがえりの夜のおやさとおパレードに出るので写真を撮ってほしいと依頼され、簡単に引き受けた。

会社を終え、私服に着替えて急いで食事をし、鼓笛隊の待機場所へ行った。「写真係の人は集まってください」というので行く并注意事項の説明があつた。

少々？ メタボな私は汗かきのため、タオルを首からかけている。一般の人と間違えるので、タオルを首や腰にかけないようにとのこと。正面から撮らない。服装も隊に順ずる服装でという。「直属のTシャツはないのですか」といわれても間に合わない。何とかチェックを通過。

さあ撮るぞ、とカメラを構えたが、八列並んだ合同鼓笛隊の端から四列目。どうやって撮るの？ とりあえずシャツターを切り、前に走っては撮り、走っては撮りの繰り返しで汗だくに……家へ帰って写真をパソコンで見ると、全部ぶれていた。

隊員のみなさん、ごめんね……この「陽気だより」を各支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用くださいますよう、お願い申し上げます。

養徳社